



「遠野物語」と山人論

文学部 林 淳

本学の図書館には、16ミリの貴重なフィルムが保管されている。まだビデオテープが普及する前に、授業用の教材として購入され使われていたものらしい。『メダカの卵』、『ミジンコの生殖』という生物学関係のものに混じって、祭礼、民俗学を対象にしたものもあるが、『柳田国男と遠野物語』もそうした16ミリのフィルムの一つである。どのフィルムも劣化を防ぐことはできず、箱からフィルムを取り出すと、ほのかに酸の臭いがただよう。

2010年11月9日、足立事務長の尽力で、『柳田国男と遠野物語』の映写会が日進市立図書館で行われた。畑の中にそびえる巨大な芸術品のような図書館の建物には、その日多くの市民が映写会のために集まってきた。ふだんでも市民が来ては、本を借り、食事を楽しみ、憩う所になっているようである。私は、映写会の後の講演会を依頼されおり、「遠野物語と山人論」というタイトルで、つぎのような話を行なった。

『遠野物語』の序で柳田は、「平地人を戦慄せしめよ」という強烈な言葉を書いている。山村で語られる伝承が、都会人の常識を裏切り、恐怖と衝撃力を与えることを期待しているような書き方である。『遠野物語』では、遠野の地理が触れられた後に、すぐに山男、山女の話が続いているところを見ると、平地人を戦慄せしめる重要な役割が、山男、山女に振られていると見てよいであろう。ところで菊池照雄『山深き遠野の里の物語をせよ』（梶社、1989年）という本がある。私は、秘かに『遠野物語』よりも優れた作品だと考えているものである。菊池は、遠野に生れて育ち、子供のときから親や親戚の人から、『遠野物語』のなかに記された人物や事件のことを聞いており、克明に、事件の背後にある人間関係をふくめて知悉した人である。柳田の場合、人名、地名の固有名詞をそれほど気にはしていない。菊池は、固有名詞で人や出来事をよく知っていて、『遠野物語』に出ている事件について、柳田が聞き取りをした佐々木喜善とは異なるニュースソースを持っていた。そして何よりも大切なポイントは、『遠野物語』で取りあげた話が、馬で荷物を運ぶ駄賃づけや博労が話す噂話、夜中に村の男たちが囲炉裏をかこみ、酔った勢いで競うように語った法螺話であったことを暴露した点である。山男が、背が高く目の色がすごく、赤ん坊を食べる凶暴な野蛮人であるのに対して、山女が、長い黒髪の美女として描かれているのは、語り手が男であって、彼らの好奇心と欲望が投影されているからである。神隠しでも、女の話は出てくるが、男の話は出てこない。しかし実際には借金に追われた男が、山に逃げることは遠野では間々あったが、話題にすらならなかった。同情されることもなかった。しかし豪農の娘や嫁が、山に逃げた時には、村中を駆けめぐる大ニュースとなったのだ。柳田が、伝承におけるジェンダーの不均等に気がつくことはなかったのは、山村の住民の物憂い、針小棒大に語る暇つぶしを予想できなかったからである。柳田こそが、典型的な「平地人」だったと言ったとしても、それほどの外的ではなからう。